

ウィリアム・アーヴィン著

ウォルター・バジ ョ ッ ト (11)

訳 渡 辺 弘
立 川 順 子

第11章 新世界の古き宗教

ヴィクトリア朝時代は、物質的知識の途方もない拡大によって他の全ての時代と区別されるということは、周知の事実である。その結果、人間は自然の力を測り知れないほど広範に支配したために、未曾有なほどに肉体上の快適さを増大させ、様々な機械装置を発明し、工場、鉄道、蒸気船を建造し、ついには驚きに近いものを感じながら自分達が新しい世界に生きているということを発見した。しかし、それを創造したとは言っても、彼らはそのことをどのように考えるべきであったのだろうか。ヴィクトリア朝時代は特に『種々の問題』をかかえた世紀であって、その中でも主なものは——全ての問題は究極的には宗教的なものであると言われている故に——古くからの宗教を新しい時代に適合させるという問題であった。限らない富、贅沢、権力の可能性はいかにしてキリスト教の禁欲主義と調和させられるであろうか。新たな啓蒙はいかにして1900年間にわたる宗教的体験に順応せられるべきであろうか。

これはイギリスの商人達が直面した様々な困難のうちのいくつかであった。というのは、19世紀の文明は基本的には中流階級によるものだったからである。その歴史は中流階級の勝利と困惑の記録である。ある意味で、それはジュールダン氏 (Jourdan, 1762-1833. 小間物商から1800年ピエモンテ総督になった：訳註) の悲劇を表わしている。

1832年に中流階級の人間がその国で支配的な力を獲得したとき、彼らは大部

分がピューリタンであったが、彼らの場合はずっと墮落したピューリタニズムであった。そのピューリタニズムはあまりにも長く俗世間の中であって、金銭および商業と接触していた。ピューリタンの敬虔さは単なる体面になり、その勇氣は単なる能率になってしまった。彼らはアーノルドが『行動する天分』と呼んだものをいまだ持ち続けていた。彼らの義務観は多くの点で深く誠実なものであったが、熱烈な人種に時として起こるように、不幸なことに、悪徳のいくつかを含むように発展していった。例えば、19世紀のピューリタンの主要な義務の一つは、金もうけをするというものであった。大いなる財産は主なる神への輝かしい記念碑であった。1832年までにはこのような光栄ある事例は、夥しいほど豊富に見られた。田舎は大きなレンガ造りの工場でおおわれ、空は煙突と煤煙に満ちていた。人々は自分達の義務を喜び、無数の工場と煙突から成る光景を眺めた。彼らは無限に増大してゆく銀行口座の残高数字を思った。恐らく、いっそう注目すべきことは、彼らの多くが天国や地獄ですらも忘れていなかったということであろう。しかしながら、後期のピューリタン達の大部分は、夢中にさせる商売の余暇に永遠を考えたのであった。神は怪しげな黄金のイメージのようになりつつあった。中流階級の中でもっと醒めた人々は、けばけばしい城を築いたり、称号や社会的地位を求めてこびへつらうことに熱中した。もっと『真面目な』人々は不安と敬虔な気持を抱きながら、金もうけをした。彼らは富を蓄積し、それを浪費しないことで自らを慰めた。彼らの態度の几帳面さと礼儀作法の厳格さは、彼らとその生活の虚栄さとを調和させた。このように一つの厳しい基準によって測られて、大多数の人間が出現した。だが、トマス・バジョットのような人間は少数であったことは忘れてはならない。進行するその時代の物質主義は、挑戦を受けなかったわけではなかった。自らはペリシテ人（実利主義者）の息子達である、ニューマン、カーライル、ラスキン、アーノルドは雄弁に力強くその物質主義を弾劾し、実際、その著書は人々に読まれた。これら偉大なモラリスト達が広く名が知られていながら、大して顧慮されなかったということは、イギリス国民の特徴をよく表わしている。彼らは知識人の間に何らかの当惑を広め、その当惑は大衆の注目をいやが応にも

自分達の方に向けさせていた一連の問題によって強められた。

言うまでもなく、偉大な人々と偉大な思想には時代を超越した要素が多くあるが、19世紀までは大部分の普通の人々は、聖書の目に見える世界からその理論を引き出していた。聖書に記述されている事柄は、確かに全く一貫しているわけではないが、神学者達はその困難さに耐え、そのために、一般的な感情に従えば、物質的世界は比較的居心地の良い快適で罪に満ちたささやかな場所、外の恐ろしい区域にとって一種の控えの間、天国と地獄の間の霊的な宇宙であった。万事が明快に説明されていた。地球はおよそ6000年の歴史をもっていた。それは神の御手によって正確に現在ある姿に創造されていたのであった。神は6日間、その天地創造の作業に没頭された。そしてその期間に同じ合目的性をもって、太陽、月、星、全ての生物、そして最後に人間を御自身の似姿に型どって、自ら監督するという特別な目的をつけてお創りになった。そのような理論は、かなり粗雑ではあるが、明快で単純、詩的で道徳的であった。それは無知で無批判的な心に精神の心構えを奨励するのに素晴らしく役立った。しかし、19世紀の初期の数10年間までには中流上層階級の人々はそれほど無知で無批判的ではなかった。産業革命の種々の成果は、科学と科学的方法に威信を与えていた。浪漫主義運動は人間に自然と外界を恐れと疑いをもってではなく、興味と共感を抱いて眺めさせた。研究のあらゆる分野で科学の理論が提出され、科学的発明が成されていた。19世紀の初頭に、ドイツのトレヴィーラーヌス (Treviranus; 1776-1837. ドイツの科学者。無脊椎動物の組織学的・解剖学的研究で有名で、生物進化機構を考えた：訳註) とフランスのラマルク (Lamarck; 1744-1829. フランスの科学者。『無脊椎動物史』などを著わして、ダーウィンの進化論に50年先立ち、用不用説・後天的性質遺伝説を特質とする進化思想を述べた：訳註) は、「全ての高等な生物体は、ゆっくりした発展により組織的には単純な生命形態から生じたのであるという概念」¹⁾ を発表した。動物の王国は固定した分類体系ではなくて、広大、不確実で、無限に変化する掟に従っている一つの秩序のように思われ始めた。1830年、サー・チャールズ・ライエル (Charles Lyell; 1797-1875. イギリスの地質学者。『地質学原理』を著わし、地質時代の地表変化は自然変化によるとし、近

代地質学の基礎を基いた：訳註）は『地質物原理』（*Principles of Geology*）を出版し、近年の地質学研究を総括して、地球は大変な歴史をもち、山、谷、地形学の主な特徴は、決して永遠不変のものではなくて、砂洲のように変化しており、自然の法則に従って絶えずそれ自体を築いては破壊することを繰り返しているのだと証明した。1859年にチャールズ・ダーウィン（Charles Darwin）は『種の起源』（*Origin of Species*）を発表した。その書物の中で彼は進化の事実を立証するために、多くの証拠を提出しただけでなく、生物界の根本的法則と思われるものを自然淘汰の理論の中で提示した。その書は最初、あざけりをもって受け取られ、次には驚きとともに、そして最後はあらゆる種類の狼狽と熱狂をもって受け取られた。普通の宗教上の信念とは全く反対のガリレオ（Galileo）やコペルニクス（Copernicus）やニュートン（Newton）の行った発見は、何にもまして生き生きと大衆の前にもたらされた。大部分の正統的な思想家達は、キリスト教が啓示に依存しているのだと主張したが、今やその啓示が多くの点で間違いであると証明されていたのだ。何かなされるべきだったのであろうか。

カント（Kant）は——単なる論理がそれを解決しえる 限りにおいて——60年ほど前にその難問を解決していた。彼は経験には二つの世界、二つの面があると主張した。一つは物質的なもので、五感と通常の理性によってのみ近づくことが出来る。もう一方は霊的なもので、道徳的、すなわち『実践的』理性にだけ知られている。それぞれの種類の理性はそれ自身の領域で至高のものであり、他方の領域に厳然と判断を下すことは出来ない。霊的領域に関しては、人は理性が要求するとおりに疑ったり、受け入れたりする自由を制限することなく、感覚の領域内で彼の心が命ずるままに信ずることが出来る。何故なら、科学が霊的存在という目に見えない世界の実在を論駁しえないのは、宗教が感覚の世界に関する教義を主張しえないのと同様だからである²⁾。ジェームス・マルティノウと彼の友人ハットン、そしてバジョットのような数名のイギリスの思想家達は、カントの行った区別に助けられて、当時の宗教問題に対して一つの解決法を試みた。

恐らく、この区別はやや簡単すぎるのであろう。人間は現世から彼が形成し

たイメージによって来世を考え、論理的には彼が選ぶどのような種類の天国を信じようと自由なのであろうが、その物質面が彼の物質現象に関する知識と矛盾するような天国には恐らくあまり満足しないであろう。

しかし、多くのヴィクトリア朝人達は単に天国を改革するだけでなく、全くそれを廃止してしまう気になった。実際、理性以上に想像力が信仰を誘導するものである。小さな旧世界の小綺麗で美しい壁はくずれ落ちてしまい、人間は無限に複雑で素晴らしく、限りないほどの太陽光線にあたっても暗く、時間と空間という深淵に果しく拡大してゆく巨大な神秘的宇宙の中にいる自己を発見した。その光景は魅力的ではあったが、人間の心にはそのような二つの世界を受け入れる余地はないといってもよかった。霊的なものは限りなく遠い所に後退し、神は姿が小さくなって殆ど消えいるような点になってしまった。事実、思想の傾向はこれ以後ずっと物質主義の方向に向かった。新しい信仰の到来を予言した者達は勝利をおさめた。彼らは一つの公式をもたなかったであろうか。ニュートンは彼らに無生物界についての解説を提供していたし、今やダーウィンが生物界の解説を提供した。彼らは鍵をもっており、鍵穴として宇宙を考えることを楽しんだ。そして、人間という生物体が原形質のようなものから生じたのだとすれば、宇宙がいかなるものであるのか、それが将来どのように変化するのかを誰が言えようか。イギリスはもうすでに工場と煙突で埋めつくされてしまったのではなかったか。進歩という威風堂々とした行進は、すでに規則正しい速歩になってしまった。人がこのうえ何を期待しえようか。多くの人々は自信をもって「遙か遠く神聖なる出来事」、すなわち時間と空間の中で達成されるべき天国とか至福千年（キリストが再臨してこの地を統治するという神聖な千年間）を楽しみに待ち、その間、根本的な問題を不明確な未来に押しやり、金もうけや事実を積み重ねることといった単なる行動の中だけで神の栄光をたたえた³⁾。

また別の者達は、われ知らず懐疑的な心的態度に陥っていたが、信仰の安らぎと安全を願った。アーサー・ヒュー・クラフや若きマシュー・アーノルドは自己を次のようにみていた――

「二つの世間の間をさまよっている。一つは死者の、もう一つは生まれ出るには力不足の。」⁴⁾

ニューマンのような数少ない人々は、見事に織られた論理というはしごに乗って、信仰という避難所に登った。ニューマンは知性を軽蔑した点で非現代的であり、普通の生活に疎い点で視野の狭い人間であるとわれわれは思うかもしれないが、彼の精神生活の美しさと孤高さは誉め称えなければならない。これほど完全なる威厳を示した現代人はきわめて稀だからである。しかし、はるかに大多数の思慮深いヴィクトリア朝人は、こっそりと何らかの形の妥協をし、そのような人物のうちで、中世の精神主義と現代の物質主義という正反対の二極の間で自己満足的に揺れ動いたテニソンは恐らく最も顕著な例であろう。恐らく現代は例外であろうが、根本的現実深く一貫した意識を殆どもたずに、これほど多くの精神力と活動を見せた時代は確かに存在しなかった。

当時の宗教的問題に対するバジョットの解答は、いかにも彼らしく如才ないものである。そこには妥協ではなく、調停が含まれている。われわれは「両方の世界を最大限に利用する」よう努めるべきであると彼は述べている。われわれはあまりにも多くの霊的なものを知ろうとすべきではないし、物質的なものを過度に利用してもならない。われわれは一方の世界でつましく、他方の世界で穏やかに、両方の世界で幅広く人間らしく生き、とりわけ健康な肉体に宿る健全な魂を発展させることを熱望しなくてはならない⁵⁾。

バジョットは狭量な人間が首尾一貫していないと思うような幅広い精神の持ち主である。私は彼のことを世俗に通じた人間と呼んできた。彼はまた現世にあきらめの境地を抱いた人間でもあった。彼の心的態度はいくつかの点で典型的に宗教にかかわっているものであり、全ての信仰心の篤い人々と同様に、彼は平凡な生活に生来の不信感を示している。「豊富な経験と記録によって、今やかなりの程度まで確立された世界についての真に痛ましい事実があるとすれば、それは知的で怠惰な幸福が子供のような精神をもった人間にとって全く否定されているということである」と彼は言明している。われわれは些細な心配

事と、つまらない苦勞に縛られている。われわれは「貨幣というくびきに卑しく従属」している。さらにもっと奥深い真剣な語調で、彼は同じ評論の中でウィリアム・クーパーに関して語っているが、ここで私が「われわれの人生の言わば、骸骨とも言うべき暗い現実」⁵⁾という言葉を読者に思い出させる必要は殆どないであろう。

かなりの程度まで、この世界は勿論人間が創り出すものであり、バジョットがこの世界に大そう不信を抱いていたことの主な理由の一つは、彼が徹底的に人間というものを理解していたからであった。これほど明晰で冷静、超然とした態度でもって、良くも悪くもこれほど多くの異なった社会階級の間人達を觀察した作家も稀である。彼は利他主義がいかに弱いものであるか、理性がいかにか弱いものであるか、情熱がいかに力強いものであるか、私利私欲がいかに強力で、衝動がいかに気まぐれであることを知っていた。進歩がいかに稀少なもので困難であるか、野蛮人と文明人との距離がいかに短いか、その距離をカバーするのに必要な努力がいかに長時間を要する、とてつもないものであるかをわきまえていた。彼は物質的進歩が道德的進歩を意味することがどれほど少ないかを理解していた——

われわれは科学のもたらす様々な驚異の中で生活しているが、それらがわれわれを変えることがいかに少ないかを知っている。人生の本質的要素は、今はもう見られない。われわれは列車で出掛けるが、旅の終点でわれわれが向上しているわけではない。われわれには鉄道、運河、工業、製品といった明らかにすぐれたものがあるが、それらのものが魂にふれるわけではない。どういふものか、それらのものは人生をより皮相なものにしているように思われる。半ば意固地な嫌惡から、現代の世代のある者は自然科学と物質的な事柄から顔をそむけてしまった。「われわれはこれらのものを試してみたが、落第である」というのが、その感情である。「動電氣の発電機や水圧プレスがあるために都合がよい人間の心とは、いかなるものであろうか。昔の詩と昔の哲学に頼っているわれわれをそのままにしておくれ。そこには少なくとも生命と心があるのだから」⁶⁾。

ダーウィンの偉大な著作のあとに生じた 浮かれた樂觀主義の只中にあっても、バジョットは依然として慎重、冷静であった。

彼の説く心理学は伝統主義的で、私がすでに述べたように、人間性の根本的二元性を強調している。人間は低劣な自己と高級な自己から成り立っている。一方はその本質は動物的で、肉欲と種々の欲望に支配されている。他方は本質において人間的な、ないしは神々しいものであり、良心もしくは道徳的意志に支配されている。大部分の人間の人生は、このような対立しあう力の間の絶え間ない葛藤を示している。長い年月を通して多くの経験に支えられてきた、われわれの人間性についてのこの古くからの概念に関して、バジヨットはいくつかの興味深い記述を行ってきたが、その中の一つを引用してみよう——

ある人々は生まれながらに次のような掟の下にある。つまり彼らの全生涯は彼らの人間性の低級な原理と高級な原理との間の絶え間ない闘いである。このような人々は言わゆる道義心のある人々である。彼らの最高の行動のそれぞれは、対立する動機の中で明確に選択されたものである。ある傾向が彼らをこちらへと運び、別の傾向があらへ、 $\frac{1}{2}$ が彼らを押さえつける。活気ある意志は力まかせに突進し、最高と思うものを全て選ぶ。そのような人間の中にある不断の至高の良心は、彼らが正しいことをするときのみ、その意志を働かせるのだと教えてくれる。間違ったことをするときには、彼らは「その本性の赴くままにさせている」ように思われる。彼らは「あわてているのだ」と言う。しかし、実際はどちらの場合にも普通、意志による行為がみられるのである。彼らが間違った行為をする時に、ただそれが弱くなるにすぎないのだ。何故なら、かなりの善人にあるては良い方の原理が適度に強いときには、彼らは打ち克つからである。彼らが征服されるのは、良い方の原理が大変弱々しいときのみである。しかしながら、事実は明らかに必ずしもそのとおりではない。時には、間違った原理がそれ自体、はっきりした目的で明確に選ばれる。良い方の原理は意識的に押さえられる。分裂している人間性という存在自体が一つの矛盾である。このことは人間性についての新しい解説では決してない。1800年間もの間、全てのキリスト教徒は、民族の掟に従わざるをえない聖パウロが心の中の掟と戦っている姿の描写を驚嘆の思いで見えてきた。言葉では大いに異なるが、意味においては似ている表現がアリストテレスの最もよく知られた一節のいくつかに見出される⁹⁾。

この文章もまた意志の自由への信念をはっきりと示しており、実際、バジヨットは運命予定説や何らかの種類の科学的決定論を信ずるには、あまりにも現実的な人間であった。克己心は困難で高度に達成されることは稀ではあるが、全ての人間の中に広く存在するという教義に対して、バジヨットは生涯、嫌悪感

を抱き、『自然科学と政治学』の中で彼が進化論を受け入れる際に、人間の本性に関する機械的な解釈を受け入れたのだという非難から自分自身を繰り返して守った。

多くの思想家と呼ばれる者達は、宇宙を微妙な欠陥をもった精巧な機械、すなわち潜在的には完璧で、一つのゆるんだボルトがなければ、有能な一つの巨大な機械とみなしていたように思われる。当然、彼らはそのボルトを知っていて、必要な指のひとひねりを与えたがっている。言うまでもなく、バジョットはそのような思想家ではなかった。人間性に自信を抱かず、現代文明の驚異に殆ど感動せず、要するに、誇りと傲慢さの満ちた世界とでも呼ぶべきものに不信感をもっている著者（バジョットのこと：訳註）からは、目新しい万能薬や魔法の鍵を期待することは不可能といってよい。彼は真に根本的問題は世代から世代へとわれわれとともに存続する問題であり、古来からの問題は古来の解決法を必要とするということを感じていたように思われる。人類に関して最大の難問は人間である。人間の徳性を強化するために、あらゆる手段がとられねばならない。人間には初期における健全な習慣、教育、宗教、高尚な文学の与えてくれる倫理的激励が必要である。バジョットの政治における保守主義は、また、人間の弱さへの彼の深い確信に由来している。古くからの習慣と伝統は、道徳的統一性の道具であり、欲望と願望に対する堡壘である。国の憲法はその内的倫理的性格の目にみえる表現であり、その文明が主として依存している構造である。それゆえに、改革は極度に慎重で、漸進的なものであらねばならない。

しかし、もし世界がこれほど邪悪であるのなら、少数の真面目な者はそこから隠退し、瞑想と自己卑下によって自らを懲らしめるべきではないのだろうか。バジョットはそこまで極端な考えを抱いていなかった。青年期に浪漫主義に耽っていたときですら、彼は決して修道院にこもって得られるような神聖さの賛美者ではなかった。孤独な黙想は人生の難事と誘惑の中で行使される美德に比べたら、はるかに簡単で心地良いものである。「肉体の苦行は日常の義務的仕事よりもたやすいと大部分の人々によって考えられていることは、全ての宗

教の歴史から全く明らかなことです。』⁷⁾と彼は1845年、母親に宛て書いている。

彼は禁欲的な宗教に反対するよりもいっそう強く病的な宗教に反対し、この問題に関する彼の考えは、ピューリタンとピューリタニズムへの批判として恐らく最もよく要訳されるであろう。カルヴィニズムが呪文を唱えて呼び出す『悪夢』は、教養のない粗野な心に少しの健全な恐怖と敬虔さを吹き込み、がさつで鈍感な心にある種の高揚感を生じさせるであろうが、それが生き生きと実感されればされるほど、病的で危険なものである——「目に見えない様々な現実を長く黙想することは全く困難なことで、普通の人間性をもった人間のかかわることではないように思われる」⁸⁾。大多数の人々の心の強靱さは、病的な教義に対するもって生まれた防衛機能である。実際、アーノルド博士のような低教会派の牧師が、その重々しく厳かな教えでもって大いなる善を成したのもっともである。

アーノルド博士は平凡なイギリスの少年、つまりわれわれのよく知っているあの小柄でりんごをかじっている動物にとって殆ど疑問の余地がないほど称賛すべき校長であった。彼は苦勞して少年に信念、或は少なくともふわふわして混乱させるような概念を（その言葉を使用出来るなら）たたき込んだ。その信念とは、この世にはいくつかの大問題があり、不可解な問題があり、知識は無限の価値をもち、人生は厳かで厳粛なものであるというものである⁹⁾。

しかしながら、クラフのような真面目で想像力に富んだ学生には、彼の教えは悲惨な影響を与えた。それは病的な内省、緊張し、疲労困憊させるような精神状態、「大問題への精根尽きるような取り組み方」⁹⁾に至った。ウィリアム・クーパーの穏やかで従順な心には、もっと苛酷でカルヴィニズム的な教えは、狂気そのものに至った。ジョン・ニュートン牧師 (The Reverend John Newton) はバジョットが英国国教反対論者 (Dissenters) の中で最も異議を唱えるべきものと考えるところの殆ど全てを体現している人物である。

ジョン・ミルトンはバジョットが称賛すべきであると考えた全てを具現化した人間であるが、その偉大な詩人の中にも彼は病的なところではないにしても、少なくとも無慈悲さ、非人間性とピューリタンの性格の典型的悪と一般に信じ

られている狭量な禁欲主義を見出している。私が第10章で引用したミルトンの性格研究ほど、孤独で瞑想的な宗教に対するバジョットの態度を巧みに解説したものは恐らくあるまい⁹⁾。バジョットはこの世からあまりに多くのものを期待することを自らに戒めてはいるが、それから全く顔をそむけることは重大な誤ちであると深く感じていた——それは単にそのような行為が経験という主要な分野を除去するだけでなく、その他の分野における経験の可能性を大いに減ずるものであるからという理由で。われわれは同じ精神と性格で両方の世界を考え、われわれの人生が偏狭で、かたよった人間や幅広く人間味にあふれた人間達の目に見える世界で営まれるように、精神という目に見えない世界についてのわれわれの思想や概念も、そのようなものになりがちである。それゆえに、われわれは不健全な一面の物の見方に気をつけなければならない。われわれはまた現在の生活を単に忍耐すべき一つの試練とみなすような誤ちを犯すべきでもない。彼の性格のよりいっそう厳格に宗教的な面を反映している、反対の立場を時折、暗示することもあるものの、バジョットは概して、この世において美德と知性が高潔で永続的な幸福を築くことが出来る と全面的に確信していた。彼がこの見解をどこにも公然と表明してはいないことは事実であるが、彼の思想の全傾向がそれを暗示し、必要なものにしている。もし彼が広範な人間的体験こそが何らかの現実的で中味のある幸福を提供するのだと考えなかったら、確かに彼は敬虔な人間の禁欲主義をこれほど厳しく批判しないであろう。だが、そのような幸福の本質とはいかなるものであろうか。

明らかに、それは「両方の世界を最大限に利用する」ことから結果的に生ずるものである。それは純粋に宗教的安らぎと落ち着きでもなければ、単なる動物的自己満足でもない。それは全く内的な作用の結果でもなければ、全く外的な作用の結果でもない。事実、ヴィクトリア朝時代の一般大衆の重要な生活観であった、単なる無目的な表面的活動に対して、バジョットはヴィクトリア朝の実業家ではあったが、最大の輕蔑を感じていた——

人類が真に節約しがっているものは、思想である。立派な思索家達は人間の様々

な能力を行使することへの美しい称賛を公表している。そして普遍的信条は、理性を行使することが人間の喜びのうちで最高のもの、最も真実なものであるということである。しかし、もし現実生活を絶えず観察するものがいたら、人間は自らがそれを制することが出来るかを決して考えたりしないものだと分かるであろう。すなわち、彼らはそれに向かって迫立てられねばならず、それを避ける工夫を発明し、別の点で楽しむことには欲が深くとも、このことを楽しむことは、もし出来ることなら、拒否するのである。

このような工夫の一つが活動である。人々はあちらこちらへと駆けまわる。彼らは決してじっとしていない。彼らは1日に8つの委員会に出掛け、それぞれの会合に少しでも遅れるのを気にし、着いた途端に時計を見る。彼らはせかせかした誤ちをほとばしらせる。何かをする前にちょっとじっくり考えてみることをあなたが提案しようものなら、彼らはこう言うだろう——「『今』そのことで頭を悩ますのはよしでしょう」。そして万事がうまく行かなかったときには、彼らには調法な弁解があるのだ。「とても忙しかったものだから、『それを』ちょっと考えてみる間もなかった」と。彼らの仲間うちでは、そのような人間は常に素晴らしい実業家であると考えられる。彼らの妻と家族の者が彼らを信頼するのも、もっともである。というのは、彼らは豆を煮るのは大変な手間と労力をかけ、皆を不快にするほどであるので、もっと上手なやり方を知らない者達は、豆が煮えているのだと想像するのである¹⁰⁾。

いかに有益なものではあっても、管理上の決まりきった仕事から成る生活に対しても、バジヨットは高い価値を置かなかった。共同資本の銀行の経営と個人経営の銀行とを比較して、前者がその地位のための技術的訓練を受け、その全時間を銀行に捧げるよう期待されている一人の経営者によって統轄されると彼は説明している——

しかし、ロンドンによくあるタイプの個人経営の銀行は、そのような監督者をもたない。それはパートナーによって管理される。現在では、このような人々は一般的に金持ちで、こまごまとした実務に取り組むことの出来る人はめったにいない。そしてたとえ出来たとしても、彼らの全生活と全精神をそれに捧げる気にはならない。蓄積された富、教育、そして偉大なロンドンの銀行家という社会的地位をもった人物は、自分自身を犠牲にするとしたら、よほどの愚か者であろう。彼は不愉快で、適さない生活のために、自分の適した、快適な生活を犠牲にするのであるから¹⁰⁾。

しかし、より充実した高潔な幸福を可能にすることを求めて、バジヨットは

はるかに意義深いと考えられるかもしれない活動を切詰めてもいる。ハットンによれば――

バジョットはサー・ジョージ・ルイスとともに、現代人はあまりにも多くのことをしすぎると主張した。すなわち、人間の公的な活動の半分と私的活動の大部分は、なされなかった方がよかったものである。現代の政治家と大衆は、喜んで自らに様々の責任という重荷を背負いすぎている。人間はそれに基づいて行動が展開されるべき原動力をまだ十分に立証してもいないし、彼らがそのような行動をとってしまっていて始めて、行動を抑えた方が賢明であると気づくのである……人々はインドを断念すること、植民地に自力で切り抜けさせること、そしてヨーロッパで4番目か5番目の列強としての地位を冷静に受け入れるよう英国国民を説得することに対するまことしやかな言い訳が見つければ、喜んでであろう。そしてそのことは彼の見解では、冷笑的な或は非愛国的な願望ではなくて、全くその逆であった。何故なら、そのような成り行きは、一般的に言って、愛国的な精神の価値の度合と良心と審美眼を結果的に生じさせるであろうと彼は考えていたからである¹¹⁾。

要するに、国民の生活には外的活動と同様に内的活動が存在すべきなのである。世俗的生活に不可避の荒っぽい実利的労働は、永続的幸福に必須の美的、知的、道徳的活動によってバランスを保たれ、高められるべきである。このような見解は、実際、アリストテレスの *οἰομένη* すなわち余暇の教義そのものに相等する。そして余暇をバジョットは当世風の青白きインテリのように一種の審美的散策として考えていたのではなく、宗教的概念に満ちた瞑想生活へ溶け込んでゆく一つの生き方として考えている。

確かに、バジョットの宗教観は全く精神的なものというわけではない。富を頭から非難するような銀行家兼エコノミストというものを想像することは困難であり、事実、バジョットは余暇を可能にし、それを優雅で芸術性に富んだものにしてくれる手段を提供する際に、富がきわめて重要であると考えているのだ。さらに、すでに見てきたように、彼がまた重要なものであると考えている地位と同様に、富は上流社会への登龍門であり、それゆえに視野を広げ、人を社交的にするという影響力をもっている¹²⁾。正しく使われるなら、それは余暇を豊かにし、精神という繊細でつかみどころのない実体と、社会という苛酷で

はあるが、現実存在する活力に満ちた実体とを結びつけている。

要約すれば、幸福は労働と余暇、外的行動と内的行動の適切なバランスに依存している。幅広く人間的であるためには、内的行動が道徳的であらねばならないので、幸福が美徳と自己完成の追求に依存しなければならないのは明らかである。完成ということのバジョットの概念は、言うまでもなく、広範で調和のとれたものということである。彼は美徳というものを両極端の間の中庸、内的釣り合いと均整さ、魂の微妙な釣り合いとバランスというように人間性中心に考えている。彼は全ての過剰、過度な善に対してすらも反対している。「初期のクリスチャンに関して、彼らがクリスチャン『であった』ということ以外に何も好意的意見を述べることは出来ない。われわれは彼らの中に何の形式も均整さも見出せない。知的業績も、行動における用心深さも、理解力における思慮分別も全く発見出来ない」と彼は述べている。要するに、彼らは熱狂する人々だったのである。彼らの信仰の訴える力は全て、「危険を顧みない、全く冒険的感情」¹³⁾に向けられていた。人間的な美徳はバジョットの著作の多くの点で、様々な状況の下で描写され、推奨されている。それらはイギリス人の国民性についての彼の概念の基礎にあり、すでに私が部分的に言及したように、彼の理想的作家についての概念の基礎にもなっている——

偉大な世俗に通じた人でもある天才の著作と、それ以外の全ての著作を区別しているものは何かを描くように誰かが頼まれたなら、彼はこの同じ言葉『活力に満ちた中庸』を使うであろうと思う。そのような著作が決して生き生きとしていないことはなく、過激であったり、誇張されていることも全くない、それらは常に良識にあふれているが、その良識は決して退屈な良識ではない。それらには作者を熱狂させるような気魄がこもっているが、それらの一行一行は穩健、健全な作家の産物であると彼は述べるであろう。英国においてこの最高の殆ど完璧に近い見本がスコットである。ホームーはわれわれが判断しうる限りにおいて完璧であった。シェークスピアは当時貧弱な教育と邪悪な時代の種々の欠陥のために、たちまちに過激さの中に自己を見失ってしまったが、しばしば久しく完璧である。それでもホームーと最も良き時代のシェークスピアとスコットは（別の点では彼らに匹敵しないが）この顕著な特質を共通にもっている——すなわち、生活が中庸と結びつき、精神が理性と結合しているのである¹³⁾。

恐らく、バジョットはこれらの美德を描写するよりも、もっと巧みにそれらを例証したであろう。確かに、人生を冷静に観察し、考察してきた人間のもつ超然とした心、心の落ち着き、穏健さ、一貫した人柄とともに、彼が実務の世界で様々な重要な役割を演じてきた人間のエネルギー、勇気、判断の素速さ、多才さ、幅広く実地的なものの見方をもっていたと言っても過言でない。『瞑想録』(*Pensées*)の中でパスカルはこう書いている——

一つの徳、たとえば勇気をどんなに極度に持っていても、極端な勇気と極端な寛大さをあわせもっていたエパミノンドスに見られるように、同時にその反対の徳を持っているのでなければ、私はそれを称賛しない。なぜなら、もしそうでないなら、それは上昇ではなく、下落だからである。人は一つの極端にあるからとてその偉大さを示すものではない。むしろ同時に二つの極端に達し、その中間をすべて満たすことによって、それを示すものである¹⁴⁾。

バジョットに関して、これらの言葉はただ単に一つの美德に関してのみならず、全体として彼の性格にとって、奇妙なほどあてはまっている。彼は行動型の人間と哲学者の両方であり、両者の空間を埋めた。

それゆえに、バジョットの信念の全体的性格がそのようなものであるなら、どのようなプロセスによって彼はそれに達したのであろうか。その論理的基盤は何であろうか。いくつかの点で懐疑論に共感を示しているが、彼は実際には懐疑論者ではなかった——全ての新しい概念は必然的に真実であるとか、われわれが呼吸し、歩くこの粗野な実在する世界が必然的に唯一の世界であるということを疑うという点で、今日のわれわれの少数の者が懐疑論者であるということは除外しても¹⁵⁾。しかし、彼は人生の様々な道理にあった確実な事柄を覆えそうとするという意味の懐疑論者では決してなかったし、またニューマンのように、別の真理をほめそやすために、一方の真理を弱小化することもしなかった。事実、バジョットは過度の疑いは人間を麻痺させると主張した。「確信の感情について」(*On the Emotion of Conviction*)で彼はこう言明している——

強烈な確信というものは、自ら記憶を作り出すものであり、もしそれらが立派な証

拠のある真理のためにとっておかれたなら、機知に富んだ知性、行動における自信、人格の一貫性を与えるであろう。そして、それらのものは確信なしにはもつことが出来ないのである。実際、信じられている命題が偽りであるとき、しばらくは確信はこれらの恩恵を授けるが、それから真理を見てしまったために、精神をだめにし、たいそう危険なものになる。何故なら、信じていた者は自己の誤ちを発見し、知性の混乱、行動におけるためらい、人格の支離滅裂さは、多方面にわたる情熱的確信が全面的に崩壊してしまったことの確かな結果だからである¹⁶⁾。

この評論が明らかに言わんとしていることは、人間は自らが限らない冷静さと用心深さで形成してきた様々の信念を情熱的に力強く感じるべきであるということである。

特に根本的で包括的な場合の、抽象的・形而上学的原理について語ることを彼は嫌った。それゆえに、彼の究極的な論理上の立場を決定するのは困難であるが、鍵は恐らく、若い頃に彼が熱心に研究したカントの中に見出されるであろう¹⁷⁾。バジョットは私がすでに説明した見解、すなわち、この世には二つの別々の経験の領域があり、従って信念に到達するのに二つの方法があるという見解を抱いていたように思われる。物質の領域では、人は感覚の証拠と理性の作用から信念に到達する。霊的領域においては、理性の作用と良心の告知からである。どちらの思考様式も、もう一方の固有の分野に合法的に侵入することは出来ない。「現象界の様々な事実と法則を自由に偏見にとらわれずに研究しても、決して信念の基盤に触れることは出来ない。自然科学は、ものごとの法則という領域のみに関する知識を導くだけである。それはそのようなものの内部の道徳的意味をわれわれに授けることは出来ない」¹⁸⁾。同様に、神学はこの世の起源と種の発展というような問題に判断を下すことは不可能である。実際、神学や教義を放棄せずに、バジョットはその生涯の間、典型的な高教会派(High Anglican; 教会の権威・支配・儀式を重んずる英国国教の一派: 訳註)の立場から、聖書の文字通りの真理を否定し、完全に現代的態度をとる立場へ後退してしまったように思われる。彼は作家としての経歴の初期の頃から、ドイツ人の聖書批判と現代科学、特に生物学的進化の分野における種々の発見の両方に影響を受けたらしい。1862年に「クラフの詩」について書いているときに、彼は人間の

神概念は進化するものであると述べている——

オリンパスの神々は、きわめて明白なわかりやすい意味で、この地球の一部分である……族長が格闘した神は……彼が存在しなくても挑戦されたかもしれない。彼はそのような種類の人間であった。キリストが語る神とこれらと比較するなら、すなわち、いかなる時にも姿を見られたことがなく、誰も見たことがないし、見る事が出来ず、その性質が無限で、その通った道を発見することは不可能な神と比べるならば、その変遷は明らかである¹⁹⁾。

確かに、この一節は旧約聖書への文字通りの信仰を暗示しているわけではなく、社会研究に進化論的概念を適用させている『自然科学と政治学』は、そのような信仰を長々と暗に否定しているものに他ならない。ハットンはバジョットについて次のように書いている——

彼がかったの私以上にキリスト教の歴史的証拠の力に関してずっと疑い深くなって、(どの程度の個人研究に彼の見解が依存しているのか私には分からないが) ヨハネ福音書の使徒の素姓を全く斥けてしまったのは確かである。彼が否定的結論に達したことはなかったと私はかなり確信しているが、恐らく、後年彼の心は奇蹟に関してあやふやな状態にあったのかもしれない²⁰⁾。

彼は後年には、ますます政治学者、経済学者となる傾向があり、概して科学的方法の将来に強い関心を示していたが、いかなる意味でも決して不信仰や無宗教に陥ることはなかった。自然淘汰による進化の教義を受け入れてはいたが、バジョットはその教義の唯物論的見方を採り入れていたのではなかった。「『いわゆる神の企みと計画から生じたとする議論に含まれている概念と比較したら、新しいダーウィンは造物主に関するより高度な概念をどれほど紹介したのであろうか』²⁰⁾と、この問題に関する私との対話の中で、彼はしばしば語っていた」とハットンは記している。

しかしながら、科学への称賛にもかかわらず、バジョットはカントのように、肉体的能力、すなわち知覚力よりも精神的能力に卓越性を与えているように思われる。だが、そのような能力の知覚力がこれほど客観的価値をもたないのであれば、そのような卓越性はどのように授けられるのであろうかが問われるか

もしれない。形而上学的真理を構成するものに関して、きわめて大きな意見の相違は存在しないのであろうか。多くの者は意志の自由、人間の弱さ、人間性の根本的二元性、そして永続的幸福を達成するための自己修養の必要性といった教義ですらも否定しないであらうか。バジョットは大いなる意見の不一致は確かに存在するが、才人・賢者の間にはある意味深い共通性があると答えている——

本能的良心を信ずる人々は、しばしば人間性の多様さと変りやすさに傷つくものであるから、感情の本質的点において、バトラー、カント、プラトンのような異った人々の間の偶然の一致がいかに完璧であるか注目する価値がある。思想家達の間で、時代や性格の相違は殆ど問題にならない。風になびくロープをまとい、揚げ足取り好きのアテネ人と来る日も来る日も対話する偉大なアテネ人(プラトンのこと：訳註)、ダラム(イングランドの北東部の州及びその首都)の炭坑をさまよう、もの静かな教区牧師(バトラーのこと：訳註)、無粋なケーニヒスベルグ(カントの生地で、彼は終生この地を離れなかった：訳註)の煙草をくゆらす教授は、その対照が芸術にとってあまりに大きいものでないとしたら、描くに値するトリオを形成するであらう。しかしながら、われわれが超自然的宗教、すなわち良心の宗教と呼んできた一連の全真理と理論は、他方にとってと同様、一方にとってよく知られたものであり、最も顕著ではないにしても、三人全ての教義の最も重要な特徴である²¹⁾。

後期の著作、「人間の無知について」(“The Ignorance of Man”)の中で、彼はこの見解を敷衍している——

種々の信念は、社会の底辺では全く異なっているが、社会の頂点では一致する、或は一致する傾向がある。社会が進展するにつれて、美と道徳と宗教の基準もまた固定しがちである。世界中の至る所で、上流階級の信条はこれらの点で決して同一であるわけではないが、全く似ていないわけでもなく、類似点に近つき洗練さの度が増し、善が向上し、妨害する力が衰えるにつれて、ますますそれに近づくものである²¹⁾。

バジョットが根本的には意見を異にする人々から大そう影響を受けたということは、彼のように超然とした人間の特徴である。確かに、彼の宗教思想に最大の影響を与えた人物は、バトラーとニューマンであったが、両者に対して彼は一つの明白な異議を感じていた。彼らはあまりにも熱烈なほど敬虔であり、

あまりにも病的なほど内省的であった。彼らの人間性は気高かったが、豊かではなかった。

恐らく、両者のうちでバジョットは多くの点で自分と正反対の人間であるバトラーの方に、実際のところ、より以上の共感を抱いていたのであろう。何故なら、バトラーは内気、孤独で、憂うつな人間で、本質的には学者であり、口よりもペンの方が速く、世間や社会に頓着しなかったからである。思想家としては彼は混乱し、あいまいで、ゆっくりと痛々しい様子で真理と誤謬に至る道を手探りで進んでゆく、バジョットの生き生きした用語で言うところの『探索者』(“groper”)であった。他方、彼はまた多くの点でバジョットに似ていた。彼は慎重、保守的で実際の人間であった。世間に通曉した人間ではなかったが、ダラムの主教 (Bishop) として必然的に実務家であり、バジョットと同様に、書斎の窓から外の日常世界を常に生き生きとした感覚で書き綴った。彼は否定するよりも信ずる方が安全であると如才なく奨励しながら、細心の根拠に基づいてキリスト教の神秘に賛成の論陣を張った。そして事実、彼の著作は注意深い散文と諦観の詩の風変りな混淆である²⁴⁾。さらに、彼は退屈で平凡な人々の中に美德と真実を見る傾向があった。上すべりで抽象的な思索を嫌い、自信たっぷりの押しつけがましい才能よりも、謙虚で人を尊ぶ常識を好んだ²²⁾。全く彼はバジョットが『中味の充実している』(“solid”)と考えるような人間で、彼から多くの暗示を受けたいと思ったものであった。バジョットの宗教思想にとってきわめて重要なこれらの暗示に関して、後でもっと充分に語ることにしよう。

ニューマンの文学的天分、高揚した人生と性格、深遠な宗教と劇的な改宗は、若きバジョットの心を強力に魅惑し、彼はカトリック教会の少なからぬ賛美者となり、宗教詩に誉め称えたりもした。より謹厳となった時代に、彼は辛辣な批判でもって、われ知らず影響を受け、性格を形成されたその偉大な人物に復讐を遂げた。恐らく、彼は真剣にカトリック教徒になろうと考えたことは一度もなかったであろう。彼は宗教的体験の宝庫として、精神的政府の手段としてのカトリック教会の測り知れない価値を理解していたが、ハットンが述べて

いるように、「低級な野心の目的で教会が大眾にその権力を使用する傾向」²³⁾を懸念してもいた。彼はまた教養ある非凡な人々への教会の力を恐れていたように思われる。教会は精神的・知的自由をあまりにも認めていない。自由な個人の自然で均整のとれた成長に、教会は暴力的で圧迫するような支配力をふるおうとする。バジ ョットの意見では、典型的カトリック教徒は、あまりにも即座に命令のまま信じ、自身の理性と直観をカトリック教会の厳格な掟に無理やり順応させようとする。ニューマンは客観的で探究型の研究は殆ど試みていないために、他人の信条の弱点を発見することは驚くほど巧みであったが、自分自身の信条の独自の基盤を発見し、述べることは行っていない²⁴⁾。

しかし、バジ ョットはニューマンと多くの共通点をもっている。事実、彼は自らまさに同じ欠点を幾らか犯している。私の言う意味は、彼が客観的研究に反対しているということではない。だが、彼は実際、ニューマンのように知性に不信を抱き、想像力の役割を誇張している。人間は理性的で懐疑的ではなくて、軽々しく信じやすい迷信深い動物である。習慣と想像力をわれわれの人間性の支配的要素とみなしているバジ ョットは、また、古い伝統と古い制度の価値を強調している点でもニューマンに似ている。

彼には同様に「物質的現象は非現実的なものであり、唯一の現実とは神と魂であるという感情」²⁵⁾——それを P. E. モアはニューマンと全ての大そう敬虔な人々の特徴であると考えている——が染み込んでいた。ニューマンにとってと同じく、彼にとって目に見え、音が聞こえ、蛇行する川と重苦しい空、混雑した街頭と物憂げで単調な声の響く法廷をもったこの世は、しばしばより偉大で永続的な現実を隠す、ひどく信じがたい巨大で複雑なヴェイルのように思われた²⁶⁾。このような思想をバジ ョットは何度も、ニューマン自身の言葉でもで表明している。しかし、彼がニューマンのような神との親近感、すなわち「絶対的で全く自明な二つの存在——私自身と私の造物主のみがあるという思想」をあれほど頑固に信奉していたということを信ずる根拠は殆どない²⁷⁾。彼が神に対する強烈な感情のようなもの、または宗教的熱情に似たものを表明したものは、彼の日用文にもめったに見られないし、公けの著作にはさらに少ない。ハ

ットンは「バジョットの心には宗教的熱情が大変強かったとは思わないが、原始的な宗教的本能は確かにあった」²⁸⁾と書いている。ニューマンが目に見えない領域を心に描き、そこに靈魂を住ませ、神に個性という特徴を授けるために行ったような手の込んだ試みには、彼は実際的人間の本能的恐怖感で身がすくむ思いがしたようである。彼の出版された著作の中に表われているように、彼の宗教には神秘主義の壮麗・光輝さは微塵もない。それは現象界の向こうに浸透してゆくが、主として道德的現実どまりである。また、それは顕著なほどに大そう道德的で、つまりは想像力のというよりは行動の宗教である。

ニューマンの宗教的問題へのアプローチの仕方は、主に心理学的であり、彼の若き賛美者（バジョットのこと：訳註）を引きつけたのは、明らかに彼の思想のその要素であった。バジョットはしばしば信仰の不思議に関して彼のことを引き合いに出し、私がすでに暗示したように、彼と同様に良心を「精神における本質的原理であり、宗教の是認」²⁹⁾としている。「ビショップ・パトラー論」の中でバジョットは自然的なものと超自然的なものという二種類の宗教を区別している。前者は外的自然の美を黙想することから生じ、彼がワーズワースの汎神論を考察したときの熱烈さのもう一つの奇妙な実例である。超自然的宗教に関しては、バジョットはニューマンときわめてよく似た書き方をしている

しかし別の種類の宗教すなわち、もう一方の源泉が外界に見出されるように、その源が心の内部にある宗教が存在する。（変っているが印象的な表現法によれば）『迷信』の宗教としてわれわれがたった今、それとなく言った宗教である。この源は、大部分の人々が現に気づいているように、良心にある。（独断的思想家達によって、それと反対のことがいかに語られようと）道德的原理は、実際のところ大部分の人々にとって恐怖の原理である。卓越した良心が与える様々な喜びは、より優れた事柄のためにとっておかれるが、自分自身をわきまえている人々のうちで、生き生きとした現実の体験によってその喜びをたびたび感じたと言える人は、きわめて少ないのである。恥辱、不面目と後悔、罪の感情は道德的原理が現実 to 實際上、大部分の人間に押しつけるものである。良心はわれわれ自身の罪の宣告である。われわれは刑罰を期待している。……これからいかに自由であるかが問題である。これからいかに逃れるか——つまり、自信満々の人間を縛りつけて、その自尊心を押しつぶし、宇宙の美に怒

りを催させるような秘かな束縛からいかに免れているか——その束縛とは、偉大な動物のように、輝かしい力をもった森の王のように彼を解き放たせるのではなくて、自分自身を高めようものなら落としめられ、自己の威厳を表面に出せば神を怒らせ、それを奪われるであろうという内なる恐怖と秘かな予感でもって神を抑制してしまうものである。これが、しばしば指摘されてきたように、異教の残忍な儀式の源泉である³⁰⁾。

「勿論、われわれが英国国教会の高位聖職者に罪を帰するのは、この種の狂信ではない」³⁰⁾とバジ ョットはちょっとした特有のユーモアを込めて続けている。しかしながら、スタンホープの教区牧師とダラムの主教の優雅で洗練された宗教にも、確かにより高揚した形式ではあっても、依然として同様の不安、罪の意識が存在している。

バジ ョットによれば、これら二種類の宗教から二つの異なる神概念が生じてくる。一つは陽気で慰めてくれる存在で、その微笑は言わば外の自然の形ある全てのものに輝きわたるというものである。他方は警戒心と嫉妬心の強い神で、その目は絶えず心の奥底を探っているというものである。宗教哲学の大きな問題は、いかにしてこれら二つの概念を調和させるかということである。「われわれを勇気づけてくれる神が、苦役を強いる者と同一であること、不安の神が援助の神と同じであることをわれわれはいかにして知るのであるか」³⁰⁾。その難問の解答は、絶対的に完全なる神という仮定の中に存する。バトラーと同様、この仮定をバジ ョットはかなり詳細に主張している³¹⁾。彼はこう続けている——

人間の恐れや思いばかりでなく、空の雲や海の魚を支配しながら、良心の苦痛とともに警告するのみならず、自然の女神の微笑を通して微笑みつつ、神がわれわれの外にだけでなく、われわれの内部にも存在するということは、無限に完全なる神というまさにその概念と定義の当然の結果である³²⁾。

この所説はバジ ョットが現代の一元論の方向にどこまで近づけるかということの興味深い一例である。しかし、それに極端な解釈をほどこすべきではない。何故なら、無制限の汎神論や一元論には彼は根本的には殆ど共感していなかった

たからである。全体として、その論考はバジ ョットが生涯を通して宗教の中心の問題と考えていたように思われるもののかなり表面的な論じ方としても注目に価するものである。すなわち、外界の世界と内なる世界との調和、表面的な外見と底にある現実との調和という問題である。バジ ョットの宗教観の最も完全な系統的説明は、「人間の無知について」の評論にみられる。そのタイトルは意味深いことに、バトラーによる説教のタイトルと全く同じである。両作家はわれわれがその住んでいる宇宙について 無知であることの必然性と恩恵を洞察している。バトラーはこの無知を人間の道徳的試練の貴重な一部と解釈している。有徳な行動を大いなる知識をもってよりも殆ど知識をもたずにとる方がいっそう気高く、困難である。神の究極的性質を殆ど知らなくても、われわれは神への信仰をもたねばならない。神の正義についての知識が乏しくても、われわれは神を信頼し、自己の義務を果たさねばならない。このような根幹的概念をバジ ョットは入念で巧みな小体系に発展させ、それによってこの世の殆ど全てのものの道徳的および宗教的意味を説明している。彼が解答しようとした様々な問題は、バトラーもまたその著『アナロジー』(*The Analogy*) とその他の著作を通して常にかかわっている根本的問題である。すなわち、道徳と宗教の関係、可視的世界と不可視の世界との関係である。

バジ ョットはその評論、「人間の無知について」を書き進めるにあたってまず、道徳と宗教の間には一つの矛盾があると指摘している。一方はわれわれに公平無私に善を行うよう要求し、他方はわれわれに天国の報いを提供し、地獄の罰を与えると威嚇する。一般に提案される解決策は実際には全然解決策とはいえない。永遠の生命への願望は、まさにその対象の性質によって、通常の利己主義以上のものに高められると主張されている。あるいは福音は単なる常識にすぎないと言われる。「それは 健全なる思慮分別という充分な理由に基づいて、この世の分別ある人間に目に見えない世界を手に入れるために現世を犠牲にするよう説得することを目的とする」³²⁾。だが、自己犠牲を説く宗教はいかにして利己主義と調和せられるであろうか。再び、人間は「部分的に公平無私であり、部分的に公平無私でない、いっそう巧妙に主張される。人間はそれ

が善であるがために善を行うことを望んでおり、将来、善の報いを得ることをも望んでいる」³²⁾。しかしながら、人間性は二つの協働する動機的一方を強めれば、他方が弱まるというようなものである。もし人間が聖パウロの場合と同じく、はっきりと天国を見ることが出来るならば、街頭で殺人を犯すことを考えないのと同様、悪を行うことも考えないであろう。

われわれが宗教を道徳的に考える理由は、われわれ自身が道徳的だからである。「われわれが倫理的で応報を説く宗教を受け入れる唯一の根拠は、美德は美德であるがゆえに栄え、悪徳は悪徳であるがゆえに滅びなければならないという内部の意識である」。このような公理から、われわれは期待するものが見られるであろう『絶えざる永遠』を推論する³²⁾。自然神学者はこの解答に改良を加えることは出来ない。というのは、彼は目に見える森羅万象に神の御計画の証拠を見ると論ずるので、神は賢明であり、倫理的でも不滅でもなく、その創造物に不滅性を授けることが出来ないということを示しうのみだからである。神の啓示を信ずる者は、また彼の信仰の基礎は彼の道徳性にあるのだと認めざるをえない。何故なら、神が真実を語っていることに心のうちで気づかないならば、彼は神の御言葉に全く信頼を置くことが出来ないからである。人の信仰の健全さと健康さは、彼の徳性の健全さと健康さ次第である。「迷信深い心は神の特性のある一面、例えば神の正義をして、その心に独占的な支配力を獲得させ、それに暴威をふるわせるものだ」³³⁾。良心はこうにしてそれが本来暗示していた概念そのものによって、ほぼ破壊されてしまう。真の美德は不可能になるのである。あまりにも排他的に聖書に依存しているそのような心は、聖書の道徳的基盤を忘れ、そのために私心なく善を行うという分別を全く失ってしまうかもしれない。それゆえ、その信条は「孤立した、恐るべき教義」となり、あらゆる種類の忌むべき醜悪さをもたらすかもしれない³³⁾。

森羅万象の全構造は、人間を健全なモラリストにするよう計画されている。何故、物質的世界は倫理的世界にとってかくも不適切で、無意味な発明の才や利口さに満ちているのであろうか。それは目をそらさせるための単なる仕切り、つかの間の見せかけにすぎない。天国と地獄からわれわれの注意をそらせ、最

後の報いや罰を予期することなしに われわれを行動させるために道德の埒外に置かれている。何故、人間の生命はこれほど悲しいまでに短いのであろうか。もし人間が永遠に生きるとしたら、善と悪の結果は私心なくとらわれない態度を不可能にするほど明瞭になるであらう。「今や 物質の世界は言わゆる物質的美徳に報い、言わゆる物質的悪徳と呼ばれるものを罰する」³³⁾。不健康と法的刑罰の苦痛を加えることで、それは中庸、思慮分別、勇氣、不撓不屈の精神、市民としての慎しみを教える。それは準備としての美徳を教え込み、健全な肉体をもち、穩健で慎重な異教徒を産み出し、さらにそこから良きキリスト教徒が発展せねばならない。何故、人類の大半は明らかにこれほど完全に現実的重要性を奪われているのであろうか。彼らがたいい「良くも悪くもない、よこしまでも卓越してもいない人生を送っている」のは何故であらうか。彼らは何故かくも不活発で、「道德においては慎しみがあ、態度も見苦しくないが、会話は太そう馬鹿げているのであろうか」³³⁾。確實に言えることは、私心なく善を行いえる人はきわめて少ないからである。もし社会の半分が極端に良くて、もう半分が極端に悪いとしたら、一方の状態の結果として生ずる幸福と他方の状態の結果生ずる不幸は、科学を全く不必要にするほど明白である。われわれの義務概念は多様で不確實でもなければならない。さもなければ『蓄積された世論』が生まれ、われわれの美徳を破壊するであらうから。そして同様の理由のために、神の徳性はとりわけ、われわれからあいまいにされねばならない。だが、このような議論が依存している宗教的ないし道德的直観とは、いかなるものであろうか。それはしばしば人を誤解させ、あいまいで漠然としたものではないだろうか。社会の原始的状态においては、確かにそれは驚くほど様々な神々、迷信、儀式を生じさせるが、人間が高度な文化を獲得したところでは世界中いたるところで驚嘆するほど一様な教義の基礎を形成している。

この評論が示すものが何であれ——そしてその潜在的な反啓蒙主義とその堅固な健全性とかなり自信に満ちた手際良さという明瞭性にもかかわらず、ひどくわれわれを当惑させるものであるが——確かにそれは独特な倫理思想家としてのバジョットをあらわにしている。彼は天国のイメージをそれがこの世にお

ける人間の調和的発展の邪魔をしない限りにおいてのみ、心に留めている。彼の本当の関心は道徳にあり、その道徳とは、言うまでもなく、人間的なものである。

その論考のいたるところに主に強調されている点は、円熟し微妙な釣り合いのとれた人格をもった人間の養成ということである。われわれは魂の健全さと同様に、肉体の健康さを築き上げるべきである。われわれは全てにわたる行き過ぎを避けるべきである——そしてここでも バジヨット特有の反啓蒙主義が明らかになるが——知識の過剰ですらそうである。われわれは神の正義や神の怒り、神の性格の全ての面のあまりにも明瞭なイメージを形成することを慎むべきである。何故なら、そうすることによってわれわれは緊張し、不自然な精神的態度に陥らされるからである。そして単なる仕切りまたはヴェイルにすぎなくとも、決してこの世を無視すべきではない。少なくともこの世は人間の全能力が調和のとれた発展を遂げる場を提供してくれるからである。最後に、人間至上主義者の貴族主義的諸傾向がそこには顕著に見られる。人類の大多数は善にとっても悪にとっても道徳的重要性は殆どもたないものとみなされている。その論考が明らかに意味するものによれば、彼らは非凡な人間がその美德を試し、発展させる背景を形成するにすぎないのである。何故なら、バジヨットが重要であると考えたあの多様で調和のとれた発展を美德が享受出来るのは、非凡なる人のみににおいてであるから。

その評論における主要な概念のいくつかは、勿論、目新しいものでも驚嘆すべきものでもない。中世の神学者達はこの世が罫であり、欺瞞であるとさんざん主張してきた。彼らはわれわれが大いなる知識を僭越にも獲得しようとしてはならないと教えてきた。しかし、バジヨットの評論の実に顕著な特徴は、殆ど全てのものが一つの原理によって解釈される際の巧みさ、如才なさである。すなわち、その原理とは無知が人間を健全なモラリストにするというものである。その逆説は奇妙なほど納得させるものになっている。反啓蒙主義がこれほど明快で、形而上学がこれほど堅固で内容に富んだものであったためしはない。「人間の無知について」は宗教的信条や抽象的哲学のというよりもむしろ、科

学的仮説、聡明なる科学者が形造り、後代の忍耐強い立証のために残しておくような理論の解説のように読める。無情で合理主義的な考えに傾いているときには、人はバジョットの言っていることが正しいのではないかと思うものである。確かにいくつかの弱点にもかかわらず、彼の理論は合理的人間にとって奇妙なほど魅力的である。宇宙が巧みに計画されているということは、利口な人間にとって慰めとなるものである。しかし、宇宙がかくも苛酷で、合理的、精巧で調和がとれているというまさにその理由のために、この哲学は宗教的観念を満足させるものではない。人間はその最高の光が闇であり、悪しきモラリストにならないために神のことをあまりに厳密に考えるべきではないということ、彼が自己の周りを見る この宇宙が賢明なる偽善と慈悲に富む虚偽にすぎないということを信じたいとは思わない。真の神秘主義者はまた、報いをあからさまに期待することは高潔な徳性と相入れないということにも賛成しないであろう。人は将来報われるという利己の願望の中で善を行い始め、最終的には神への愛のために善を行うようになるのかもしれない。究極的には、彼は狭い個人的感情によってではなく、純粹で無私の喜びでもって天国を期待し、単なる個人的報いとしてではなく、より密接な神との靈的交渉の機会であり手段として天の審判を予想するのであろう。

私は「人間の無知について」が単なる合理主義にすぎないとほのめかすつもりはない。それには合理主義のもつ卑小な誇りや傲慢さは微塵もないからである。

われわれは聖性とはいかなるものであるかを痛感させられずに至聖者に近づこうとしてはならない。われわれは造物主に近づいたり、想像したりするのにふさわしくなる前に、われわれ自身の無価値性を知らねばならない。偽りの宗教のうちで最も鼻もぢならないのは、神への偏愛が常に畏怖の念をもって考えさせたり、語るのを躊躇させたりするような宗教である³⁴⁾。

しかしながら、バジョットの説く宗教は、深遠で純粹であるとはいえ、高揚した神秘的なものとは言い難い。彼をエドモンド・バークやジョン・ヘンリー・ニューマンのような人間と比較しさえすればすむ。バジョットには天使につ

いての語りが全くない。天上界 (Empyrean) への洞察がなければ、星達を超えたものへの考察も、崇高なる厭世観もない。さらに、強烈で心を奪うような神のイメージも、神の全能という圧倒的な意識もなく、人間の赤裸々な、戦慄させるような弱さについての神秘主義者の無情なる主張もバジォットには全くない。バークと比較すると、バジォットは人間性に自信を感じていたとすら思わせる。彼はこの世界にかなり精通し、その宗教は心地良く、気楽であるように思われる。

概して、バジォットの宗教は高揚した瞑想のというよりも、賢明で穏健な行動の宗教である。それは詩と強烈さよりも、バランスと健全さの宗教である。その表現の新鮮さと概念の新奇さにもかかわらず、それは言うまでもなく、大そう古いものである。全ての時代の偉大なる保守主義者達は、それに心地良さを感じ、その基本的原理に同意するであろう。事実、バジォット自ら、ビショップ・バトラーについて言っているように――

古来からの真理をその世代が要求する方法で述べることは、どの時代にも多くあることだ。つまり、古くからの難問に古くからの解答を述べること、死者によって最初発見された真理を発見するのではなく伝達すること、それらの真理を発明するのではないにしても納得させること、それらを現在生きている者達の言葉に置き換えることである³⁴⁾。

第11章 原文註

- 1) Andrew Dickson White, *History of the Warfare Between Science and Theology*, i. 62-3.
- 2) Edward Caldwell Moore, *An Outline of the History of Christian Thought Since Kant*, pp. 40-3.
- 3) Alfred Lord Tennyson, "In Memoriam."
- 4) Arnold, "Stanzas from the Grande Chartreuse."
- 5) "Clough," iv. 116; "The Ignorance of Man," iv. 105; ii. 13, 18.
- 6) "Brougham," ii. 323; "Shelley," ii. 216-17.
- 7) Quoted by Mrs. Barrington, p. 147.
- 8) "Cowper," ii. 26; "Clough," iv. 120, 121.
- 9) See pp. 178-9.
- 10) "Thinking Government," ix. 249; "Lombard Street," vi. 170.
- 11) p. 38.
- 12) See pp. 44-5.

- 13) "Gibbon," ii. 170; "Physics and Polics," viii. 130.
- 14) Blaise Pascal, *Pensées et Opuscules*, pp.490-1.
- 15) Hutton, pp.19-20.
- 16) v. 110.
- 17) Hutton, p.19.
- 18) Moore, *Crhistian Thought Since Kant*, p.41.
- 19) iv. 115.
- 20) p.18.
- 21) "Butler," i. 290; iv. 111.
- 22) Joseph Butler, *The Analogy*, i. 365; "Sermon XIII: Upon the Love of God," *Fifteen Sermon*, ii. 240-1; "Sermon XV: Upon the Ignorance of Man," *Fifteen Sermons*, ii. 268-9.
 バトラーからの引用は全て、彼の著作の W. E. グランドストーン版からによる。
 バトラーというタイトルに続くローマ数字は、その版の巻のナンバーを示している。
- 23) p.15.
- 24) Bagehot, "Clough," iv. 122-3.
- 25) "Cardinal Newman," *Shelburne Essays*, viii. 45.
- 26) Bagehot, "Hartley Coleridge," i. 189-92.
- 27) John Henry Newman, *Apologia Pro Vita Sua*, p.4.
- 28) p.15.
- 29) Newman, *Oxford University Sermons*, p.18.
- 30) "Butler," i. 273-4. 277.
- 31) Butler, *Analogy*, i. 362.
- 32) "Butler," i. 278; iv. 91-3.
- 33) iv. 100, 104, 105.
- 34) iv.107; "Butler," i. 284.